

I 章 凌雲寺跡の空間構成と土地利用の変遷

1. 史跡中部西側を中心とした空間構成について

ここでは、これまでの発掘調査で確認された遺構と瓦及び塼の分布をもとに、史跡中部西側を中心とした空間構成を復元する。

まず、瓦はトレンチ 31～197 にかけて集中しており、塼についてはこのなかでもトレンチ 197 以南において集中し、それより北側ではトレンチ 198 を北限として少量しか出土していない。このことから、遺構としては確認できていないが、瓦及び塼の両方を用いる施設がトレンチ 31～197 以南に存在していた可能性が考えられ、それより北側とは空間が異なるものと想定される。

次にこの北側の空間であるが、トレンチ 197 では建物や塼等とみられる建物等関連遺構を検出したほか、トレンチ 195 において礎石建物 301 を検出した。建物等関連遺構の周辺からは多量の瓦が出土しており、塼は少量しか出土していないため、建物等関連遺構は塼を用いない建物や塼等であった可能性が高い。また、トレンチ 195 で検出した礎石建物 301 は、建物の規模や構造、位置等から開山堂や開基堂、土地堂、祖師堂のような小堂が想定され、これらを考え合わせるとトレンチ 195 及び 197 の一帯は、寺域の中でも奥の空間であったものと想定される。この空間の東西の広がりについては、東側のトレンチ 179～181 では凌雲寺期の造成土は確認されず、その他の遺構も希薄であることから、少なくともトレンチ 197 より東側に広がる可能性は低い。対して西側では、凌雲寺期の造成土がほぼ全面で確認され、石列 307 をはじめとする各種の遺構が検出されており、寺院の施設がこの一帯に展開していたことは明らかである。ただし、現状ではトレンチ 195 及び 197 の一帯とそれより西側との関係が不明なため、これらが同一の空間を形成していたかについては今後の課題である。

また、トレンチ 195 以北については、現状で明確な凌雲寺期の遺構は確認されていない。さらに、トレンチ 169 以北では瓦が出土しておらず、その他の遺物量も少ないことから、トレンチ 169 以北は寺域の中心から外れる可能性がある。ただし、この一帯は調査を行った範囲に限られること、瓦や塼を用いない構造物があった可能性も考えられることから、今後検証が必要である。

以上を南から順にまとめると、トレンチ 31～197 以南には瓦及び塼の両方を用いた施設が存在し、トレンチ 195 及び 197 の一帯は寺域の中でも奥の空間であり、トレンチ 169 以北は寺域の中心から外れるというような空間構成が想定される。あくまでこの空間構成は、凌雲寺期でも後半段階の空間構成であり、前半段階では、遺構としてはトレンチ 197 で確認された石敷 304 が該当する可能性があるのみである。そのため、前半段階の空間構成は不明であるが、少なくとも前半段階から後半段階に移行する段階で、この一帯の空間構成が変化したものと考えられる。

その後、凌雲寺が廃絶してからは、トレンチ 198 西半で検出した遺構群にみられるように、墓地等が構築されるような空間（墓域）へと変化したものと考えられる。ただし、当該期に位置づけられる遺構は、これらの遺構群のみであり、同一の空間がどの範囲まで広がるのか、またその他の空間がどのようなものであったかは不明である。また、これらの遺構群も 18～19 世紀頃には廃絶し、現在のような棚田へと変化していったと考えられる。